

官舎に居られた先輩に申上げます。之は山本さん等がやりかけた仕事ですが今度官舎アルバムを完成し様と思ひます
何卒お寫眞一葉お恵み下さ。 (三〇・一・一七)

甘茶會由來記

山口生

「今の世に於て藝術を説くは痴人の事と稱せらる。藝術は法律の如く國を治むる能はず軍隊の如く敵と戦ふあたはず、然も尙能く人を幸ならしむ。人は謂ふ藝術は遊戯のみと誠に然りされど是の憂患に充てる人生に於て尙遊戯の地を存するはせめてもの慰藉にあらざるべきか」……と今更樽牛の文を借りる必要もなからうがこんなことをさへ解つてはくれないだらう人々が今も尙澤山ゐることを悲しまねばならない。こんな意味に於ても、ともするとドライになり勝ちな上田の學校に、甘茶會がありそしてそれが何んなものであるかを知るのも滿更無益ではなからうと思ふ。

甘茶會が Amateurs から轉じてゐることは大抵の世人は知つてゐることと思ふ。此の會の命名者には表賞したい程その名前がしつくりしてゐる。學校内及關係者のその道の小天狗達がその仕事の餘暇や一週一度來る日曜をあてに製作に腐心した結晶の現れを此の年に一度の甘茶會が心ゆくまで彼等相互の作品の觀賞や批評をさしてくるのである。

油繪がある、水彩がある、日本畫もある漫畫もあるパステル、コンテ、鉛筆、木炭、等あらゆる種類の繪が並べられる。それから寫眞がある。寫眞はその數に於ていつも第一位である。製作に割合に容易なものだからでもあらう。帝展の美術品として未だ寫眞がその中に加へられてゐないからやがては吾々の甘茶會がその仕事をやらうといふ意氣込みみである、尙彫塑がある是は數に於て少ないがその中に盛になることと思はれる。

甘茶會が生れたのは大正十二年(一九二三)の春五月である、その年は大變な好評だつたし又皆えらい意氣込みだつ

たので秋にも開くことになつた。翌年からは、作品を造る都合上や春の仕事の都合上秋だけになつた大槻霜月が半を過ぎる頃に開かれる、恰度、自然の美がそのクライマックスを過ぎ様としてゐる頃である。此間その頃のプログラムを見たら甘茶會發起者誰々とチャンと記されてゐた。曰く

井上、遠藤、高橋、大石、小見、八木、平澤、樋口、西山。

みんな一流の藝術家であるらしい、今上田に残つてゐて下さるのは井上先生と遠藤先生、それに高橋先生である。若い人は皆遠くへ出てえらい人になつてゐる。

第一回の甘茶會が産聲をあげたのは恰度僕等の二年の時だと記憶してゐる、その時に小見さんが物された「顔」の主人公の樋口さんの佛が偲ばれてならない、今年の春四月既にお家のお家の佛壇に置かれた樋口さんの寫眞と、ポートレートとしての「顔」とが交々今も泪と共に目に浮いて来る。斯うして有力な發起者の一人は永久に失はれてしまつた而もその原因が寫眞からであらうとは。

そして今は故人である樋口さんは、又井上先生や今は支那にゐる小見さんと共に大の登山好きでその道では強力以上の猛者であつた、従つて毎年の甘茶には何時も里の人々を誘惑する様な山の姿を見せずにはおかなかつた、井上先生は又今年も山の獲物を多く見せて下さる筈である。小見さんは今年は遠い國にゐられるので何うなるか。八木さんも亦今年は、昔ながらの腕の冴えを見せて下さつた。寫眞で印象の深いのは小見さんと共に山本さんである甘茶會が忘れることとの出来ない人達で素人の域を既に脱した腕前の持主である、老いて益々壯なりといふのは高橋先生である、若い人には出来ないニューモアに富んだ作品を鮮かにやつてのける。岸さんはその技量と共に熱心に會の仕事をやつて下さつた、繪の方では油繪の津田さんは第一回からの功勞者で繪畫室の中心はいつもこの人にある、北澤君もそうだ發會當時は此の外八木さんのパステルや水彩、大石さんの水彩、岩崎さんの水彩、又は漫畫石倉先生と奥さんの水彩、井上先生の山の繪の水彩等多々あつた、此の中で學校に残つてゐられる人達はみんな、甘茶會の重役である。

彫刻の類では、森山さんが第一回から傑作を出して下さる、主として木や石膏のレリーフである、土細工を出してくれる人が近頃多くなつた、尙此の外多くの人々によつて色々の藝術品が作られて來た。會員の名前を書き連ねる煩に堪へないから止める。斯うして段々に盛になつて行く吾々の甘茶會にも一定した會場がつかつてないのである、ジブシーの如く氣儘に會場を變へ、盜賊の如く空室をねらはねばならない運命にある。第一回の時は今の學生の物理化學實驗の準備室で催された、未だ木の香が新しい程の建物だつた、甘茶會は良い家に生れたと思つたらうが其れ以來三號蠶室の廊下とか宿直室又は剉桑室とか一號蠶室の二階、宿直室と轉々として一定してはゐなかつた、でも去年(第六回)は運が向いてか今の校長室の北側元圖書閱覽室が開いたのですかさず之を借りて甘く飾つたものだ、尤も之とても採光には苦勞もしたし而も尙充分といふわけには行かなかつた。

今年はやなり下つて第二號蠶室を利用した様な次第である、バックの幕とては養蠶部の日覆桑試験の際に用ひた一度ならず數回雨ざらしにされた黒幕である。でも立派な會場が出來た、官立の専門學校でも大きい様で小さいものだ。甘茶の會場にして好い様な室一つ空いてはゐない又、雨ざらしではない新しい幕の五六枚も密附して下さる人が我々同窓生の中からも一人位出ることだらうとあつかましくも待つてゐる次第である、だが近頃の不況時代に生れた甘茶會は氣の毒である。

斯の様に物質的に恵まれない甘茶會も年と共に實質的の向上が見えて來た。このことは我々の喜ばねばならぬことである、歴史の跡を一々寫眞にしても取つておけるといふが是も未だ不可能の時代である。

それにしても呉服屋の陳列を見るやうなキラビヤカナ帝展の藝術品に決して劣りはしないだらうクンストが一日も早く生れることを望む。少くとも甘茶會員のクンストに對する熱情はそれ以上である。

今年の甘茶會は恰度同窓會の代議員會と學術講演會が二十三日から催されたので此の期を逸せずに関いたのだが非常な賞讃の辭をみんなからいたゞいて半ば喜び半ば恐縮した。

御大典記念、第七歳、プログラムの活字に變つたこと、會員の數も四〇の多きに達したこと等々随分擴張革新された様にも思はれる、

殊に寫眞の方は人數も多かつたがそのレベルも急激に高くなり町の人々から「學校だけで樂しまずにせめて廣告だけでも出して公開してくれ」との注文もあつた位である。尙繪の方もいつもの人達の外に井上先生、石倉先生その他學生からの點數もなかくに多かつた。又八木さんのデッサン「裸婦」は氏がパリに滞在中に物された傑作で學校で倉澤さんが何處かに飾つておき度いと云はれてゐる。學者としての此等の人々の人生の側面に此の氣持ち餘裕を有たれてゐることを非常に嬉しく思ふと同時に、敬意を拂ふ次第である。

甘茶會も知らず知らずの間に學校の年中行事になつてゐた。會員は不定であるが何れも會期が近くと人知れぬ苦しみがある。時の移るのも知らずに引延しをしてゐると、かすかに半鐘の音が暗室の二重戸を透して聞えて來る、下宿住のY君すはこそと學校の提灯をつけて走り出した、幸に火事は自分の住所とはなれてゐたが時正に午前二時半……。

三十八度以上の休熱がありながら之も二時半頃まで苦しんで寫眞を作つた、翌日は四〇度以上も熱が出て母に看病させる不孝者之は僕だ。盛に夜の空を賑はしてゐる恵比壽講の花火を他に飾付に餘念なかつたのは、山本、岸、津田さん等飾付を終へてからといふのが、花火が終へてから終るといふ仕末。

明日の第一日の招待日には美事なプログラムをと、夜からはちめて朝の三時半までかゝつて失敗し翌日七時にはねおきてひる頃漸く間に合つたといふのは、去年の甘茶會に官舎でのさわぎである

去年からは招待日を作つた、校内の先生達の御家族の皆さんその他苟くも會員外にして甘茶會に關係あるものは皆甘茶會にとつて貴賓である、一通り見ていたゞいてから少しばかりの茶菓を差し上げることになつてゐる、

甘茶會由來記事としてあまりにも散漫なものを書き連ねたが要は甘茶會の存在と意義とを認めると同時に之に對する理解をもつてもらひたいのである、去年からは校長さへもが自作の寫眞を出品して下さつた。我々にとつては有力な

會員の一人である。

校外の同窓各位からも、校内天狗をアツ！と云はせるやうな名作御出品が願ひ度い、吾々は又それ以上腕に槌をか
けて來年アツ！と云はせて御覽に入れる。

上田の學校に甘茶會館が建設されるのも間近のことだらう。

(一九二八・一一・一一)